

ここに「文」という字があります。この字は点や線が縦横斜めに交錯している形であって、今の言葉でいえば模様、古い言葉では文様といえます。

その当時、つくられた文字のことをすべて「文」といいました。「山」という字も「川」という字も、線を三つ縦に並べてつくられた一種の文様ですから、これも「文」になります。

最古の漢字を「甲骨文」といいます。亀の甲羅や動物の骨に刻まれた文字だからです。

その次に現れるのが「金文」といって、金属に書かれた文字です。石に書かれた文字は「石文」といって、これらを総称して「金石文」といいます。

時代順でいうと甲骨文がいちばん古く、今から3000年以上前で、金文、石文はだいたい2500年くらい前になります。

この「文」に対して「字」というのは、組み合わせによってつくられたものです。

「字」には“うかんむり”がついていますが、これは本来はちゃんと家の形をしていました。“うかんむり”というのは屋根の形ではなく、家の形だったのです。家の意味を表しています。“子”はいうまでもなく子どもです。

「字」という文字は、現在では、文字の意味に使われますが、最初つ

くられた時には、「家に子どもが生まれた」という意味をもっていたのです。家に子どもが生まれる、文から生まれたものだから、家と子どもで表したのです。

このように一つの図形で作られた「文」は、その数はいたって少なかったのですが、組み合わせでつくられる「字」となると、その数は非常に多くなります。

たとえば“人”という「文」があり、“木”という「文」があります。この二つを結びつけるとどんなことが想像されるかというと、人が木に寄り添っている、あの人は木陰で休んでいる。こうして人と木を結びつけて「休」という意味を表す「字」ができます。

このように二つの「文」を組み合わせることによって「字」が画期的に増えてきたわけです。漢字の95パーセントはそうしてできたものです。

なぜ「字」というかということ、二つものを組み合わせることは、二つの「文」が結婚したということになります。一方が男で一方が女だとすると、これが結婚して同じ家に住むと、たいていは子どもが生まれることになる。

つまり、家の中に子どもが生まれるようにしてできたものだから、これを「字」と名づけたわけです。